

2020年回顧 - 今年亡くなった名演奏家を偲んで -

プログラム

今年も残すところ2ヶ月を切りましたが、2020年を振り返りますと、多くの名演奏家がこの世を去りました。今日は選りすぐりの名演奏で、亡くなった名演奏家達を偲びたいと思います。震アメリカの名チェリストリン・ハレル、イタリアの名指揮者ネッロ・サンティ、ポーランドの生んだヴァイオリンの女王イダ・ヘンデル、アメリカの名ピアニストピーター・ゼルキン、ポーランドの隠れた名指揮者ヤン・クレンツ。そしてマリス・ヤンソンスは2019年に亡くなっていますが、12月間近ということもあり、取り上げる機会がありませんでしたので、1年未満と言う事で、今回この特集に加える事にしました。(演奏家の紹介は別紙に続く)

今年の通常のCDコンサートは、今回が最後となります。12月は5日の第1土曜日に東条碩夫先生をお迎えして「特別講演会&CDコンサート」を開催します。ご期待ください。
一年間ありがとうございました。来年もよろしくお願い致します。(中川)

フランツ・シューベルト (1797~ 1828):

アルペジオーネ・ソナタイ短調D.821(1824年作曲)~ 第1楽章、第2楽章、第3楽章から
第1楽章 アレグロ・モデラート 第2楽章 アダージョ 第3楽章 アレグロ
リン・ハレル (チェロ)/ ミシェル・ベロフ (ピアノ)
(1979.8.23 ザルツブルク祝祭小劇場でのLive)

リヒャルト・ワーグナー (1813~ 1886):

楽劇“ ニュルンベルクのマイスタージンガー ” 第一幕への前奏曲 (1867年作曲)
ネッロ・サンティ指揮NHK交響楽団 (2001.11.14 NHKホールでのLive)

アントニン・ドヴォルザーク (1841~ 1904):

交響曲第7番二短調op.70 (1885年作曲)~ 第1楽章から、第3楽章、第4楽章
第1楽章 アレグロ・マエストーソ 第2楽章 ポコ・アダージョ
第3楽章 スケルツォ: ヴィヴァーチェ ~ ポコ・メノ・モツソ 第4楽章 フィナーレ: アレグロ
ヤン・クレンツ指揮ザールブリュッケン放送交響楽団
(1994.3.20 コンGRESSハレ大ホールでのLive)

*** 休憩 ***

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~ 1827):

6つのバガテルop.109 ~ 第3番変ホ長調 (1824年作曲)
ピーター・ゼルキン (ピアノ) (2003.10.19 サントリーホールでのLive)

カミーユ・サン＝サーンス (1835~ 1921):

序奏とロンド・カプリチオーソイ短調op.28 (1863年作曲)
イダ・ヘンデル (ヴァイオリン)
セルジュ・チェリビダツク指揮スウェーデン放送交響楽団 (1968年頃のLive)

ドミトリ・ショスタコーヴィチ (1906~ 1975):

交響曲第5番二短調op.47 (1937年作曲)~ 第1楽章から、第3楽章、第4楽章
第1楽章 モデラート ~ アレグロ・ノン・トロッポ 第2楽章 アレグレット
第3楽章 ラルゴ 第4楽章 アレグロ・ノン・トロッポ
マリス・ヤンソンス指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(1997.1.12 ウィーン・ムジークフェラインザールでのLive)

2020年(2019年含む)に亡くなった名演奏家

《ピーター・ゼルキン 1947.12.15~ 2020.2.1》

ピーター・ゼルキンは1947年、父が巨匠ルドルフ・ゼルキン(1903~1991)、母は名ヴァイオリニスト、アドルフ・ブッシュの娘という音楽一家に生まれました。幼少の頃からピアノの才能を発揮すると1959年、セル指揮クリューヴランド管弦楽団との共演でカーネギーホール・デビュー。恵まれた時期を過ごしますが、偉大な父の存在が重くのしかかり、暫く音楽界から姿を消していた時期もありました。その後、“タッシ”という室内楽グループを結成して復活。以降小澤征爾、ブーレーズ、パレンボイム、アバド、ラトル等多くの名指揮者と共演。協奏曲、ソロ、室内楽と幅広い活動を行いました。父ルドルフが伝統的ドイツ・ピアノ音楽の継承者となれば、ピーターは近現代音楽の良き理解者でもあり、父とは違った道で成功してきたピアニストでもあります。今日のベートーヴェン最後のピアノ作品での透明感溢れる美しい演奏もゼルキンの魅力の一つです。

《ネッロ・サンティ 1931.1.30~ 2020.2.6》

1931年イタリアのアドリア生まれの名指揮者。パドヴァ音学院で学び、1951年、パドヴァのヴェルディ歌劇場にて『リゴレット』でデビュー。1958年からミラノ・スカラ座を始め各地で指揮、1959年チューリヒ歌劇場の音楽監督に就任して大成功を収め、その後1969年の退任以降も数多くの演目を指揮して密接な関係を築きました。1962年「仮面舞踏会」でメトロポリタン歌劇場にデビュー。他にもウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、コヴェント・ガーデン王立劇場、ザルツブルク音楽祭、イタリア各地の歌劇場の指揮台上がり、オペラ指揮者としての名声を確立しました。一方で1986年より1997年までバーゼル放送交響楽団の首席指揮者を歴任。わが国には1999年に読売日本交響楽団に客演後、2001年以降NHK交響楽団に通算10回来演し、コンサート指揮者としての手腕を発揮しました。オペラはもちろん、管弦楽作品でも聴かせ所を心得た職人肌の名指揮者でしたが、わが国で多くの演奏に接することが出来たのはとても幸運でした。

《リン・ハレル 1944.1.30~ 2020.4.27》

1944年1月30日、ニューヨーク生まれ。父はメトロポリタン歌劇場のバリトン歌手、母はバイオリニストという音楽家の家で育ち、9歳からチェロを始めジュリアード音楽院で名チェリスト、レナード・ローズに師事しました。1962年クリューヴランド管弦楽団の団員となり、2年後に首席奏者に就任。1964年カーネギーホールでデビューし、1971年ソリストとして独立。その後はソリストとしてロンドン響やベルリン・フィル等世界一流オーケストラと共演する一方、パールマン、アシュケナーズらとの共演で室内楽奏者としても確固たる地位を確立。アメリカ、ヨーロッパを股にかけ世界最高のチェリストのひとりとして活躍しました。ジャクリヌ・デュ・プレの死後、彼女が使用していた1673年製のストラディバリウスを購入、優れた技巧に支えられたつやのある音色で、深みのある演奏を披露、我々を魅了しました。

《イダ・ヘンデル 1928.12.15~ 2020.6.30》

1928年、ポーランド東部の都市ヘウム生まれ。3歳からヴァイオリンを始めワルシャワのショパン音楽院に入学。大家フーベルマンに認められ、名教師カール・フレッシュに師事、名ヴァイオリニスト、ジョルジュ・エネスコにも学びました。1935年7歳でヴィエニャフスキ国際コンクールに出場、7位ながら特別賞を受賞。この時の第1位がジネット・ヌヴェー、第2位がダヴィッド・オイストラフでした。1937年「プロムス」でブラームスのヴァイオリン協奏曲を弾いてロンドン・デビュー。以後近年まで現役を続け、現代最高の女流ヴァイオリニストとして活躍しました。奥深い音色と強い精神性を感じさせる数少ない名手でした。

《ヤン・クレンツ 1926.7.14~ 2020.9.15》

1926年リポーランドのヴオツワヴェク生まれ。ワルシャワ音楽院で学び、1946年にボズナニ・フィルハーモニー管弦楽団を指揮してデビュー。1953年から1967年までポーランド放送交響楽団の首席指揮者を務めた後、ワルシャワ国立歌劇場の音楽監督を務め、1979年から1982年までボン市の音楽監督、オランダ放送交響楽団の首席指揮者歴任。ポーランド放送交響楽団時代の1963年に初来日を果たし、その後度々来日して読売日本交響楽団、札幌交響楽団を指揮しました。正規盤が少なく、知名度では低い存在ですが、豊かな表現力と推進力溢れるスケール感を持った、知る人ぞ知る名匠でした。

《マリス・ヤンソンス 1943.1.14~ 2019.11.30》

マリス・ヤンソンスは1943年ラトヴィアのリガに生まれました。父は名指揮者アルヴィド・ヤンソンス。レニングラード音楽院でヴァイオリン、ピアノ、指揮を学んだ後、1969年ウィーン音楽大学でハンス・スワロフスキーに、ザルツブルクでヘルベルト・フォン・カラヤンに師事しました。1971年カラヤン国際コンクールで第2位。同年レニングラード・フィルを指揮してソヴィエトデビューを飾ると73年からムラヴィンスキーの助手となり、以後1999年まで、常任客演指揮者として同オーケストラと緊密な関係を保ちました。1979年から2000年までオスロ・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者を務め、このオーケストラを世界一流のレベルに引き上げました。その間1997年から2004年までピッツバーク交響楽団の音楽監督も務め、2003年から世界最高峰のオーケストラ、バイエルン放送交響楽団の首席指揮者、2004年からは名門ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団の首席指揮者に就任し、名実ともに世界最高の指揮者のひとりに数えられるようになりました。コンセルトヘボウ管は2015年に退任しますが、バイエルン放送響とは亡くなるまでその地位にありました。一方でベルリン・フィルやウィーン・フィルとも密接な関係を築き、ニューイヤーコンサートには3回登場しています。ケレン味のない真摯な演奏スタイルは深い共感を得るものでした。早い死が惜しまれます。